

## 5 1. 優秀演題 発表3

### 学校教育における作業療法士の知名度に関する調査

作業療法士学科昼間部

#### 【はじめに】

我々が通っていた普通教育学校の特別支援学級に所属する生徒は、普通学級にも参加していた。また、特別支援学級に所属はしていないものの、何らかの問題を抱えている生徒も多くいた。本学校で作業療法を学んでいく中で、作業療法士は身体面・精神面・発達面等幅広い分野で介入できることを知り、普通学級への介入もできるのではないかと考えた。

作業療法士協会<sup>1)</sup>によると、全国の作業療法士は5,2154人のうち、特別支援学校で勤務する作業療法士は全体の0.2%と明らかになっているが、普通教育に関する文献はなかった。境ら<sup>2)</sup>によると一般的な作業療法士の知名度は48%という結果が出ており、学校教員における作業療法士の知名度も低いと予測できる。教員が作業療法士を知らなければ学校教育に介入することは難しいと考えたため、本研究を行うことにした。その結果から得られた情報により作業療法士の知名度を向上させることで介入領域の拡大に繋がれると考えた。

#### 【対象および方法】

小学校の教員(男性36人/女性60人)、中学校の教員(男性52人/女性47人)、高等学校の教員(男性42人/女性29人)合計266名。所要時間10分程度のアンケートを実施し、郵送または直接回収した。

内容は、作業療法士を知っているか・作業療法士を知ったきっかけ・作業療法士の仕事内容等の9項目である。本研究は大阪医療福祉専門学校の倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:大医福 第17-教-14号)。

#### 【結果】

作業療法士を知っている割合は、小学校68%、中学校53%、高等学校87%、全体では70%であった。作業療法士を知る媒体としてはテレビが最多であった。理解度は、共起ネットワークを利用し3群比較した結果、大きな差は見られず、全体的には身体機能・日常生活動作に関する理解があった。作業療法士協会の定義<sup>1)</sup>と比較すると、環境面・集団関係・対人交流・遊び等の理解が不十分であった。

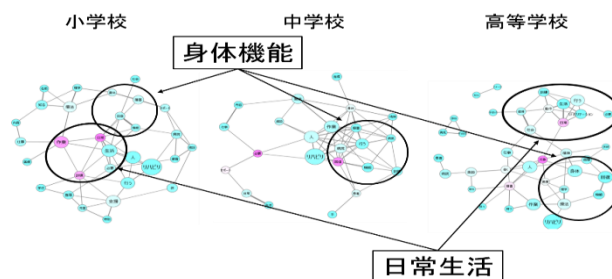


図1. 作業療法士の職業理解（共起ネットワーク）

#### 【考察】

作業療法士の仕事内容等の職業理解が不十分なため、学校側が作業療法士の必要性を感じず介入がされていないと考えた。作業療法士を知る媒体の最多がテレビであることと、理解が不十分だった結果から、テレビの内容が正確な職業理解を得られる内容ではなかったと推測する。しかし、エビングハウス<sup>3)</sup>は、テキストより動画の方が2倍記憶に残ると述べている。テレビは作業療法士の理解を深める媒体としては有効だと考えるが、テレビへのアプローチは簡単ではない。そこで、身近に見ることが出来る動画配信の利用を考えた。より伝わりやすく魅力的な動画を作成し、配信することで、作業療法士の仕事内容を含めた認知度向上につながると思った。

#### 【まとめ】

作業療法士の介入領域の拡大のためには、学校教育に携わっている教職員に対し、作業療法士の知名度向上と共に仕事内容を含めた認知度向上が必要であると考えた。そのため、認知度向上に向けた動画を作成し配信することで、正確な作業療法士の理解が深まり介入領域が広がるのではないかと考えた。

#### 【文献】

- 1) 一般社団法人日本作業療法士協会 HP (internet)  
<https://www.jaot.or.jp/about/definition.htm>
- 2) 境信哉, 村井真由美・他: 作業療法士の知名度に関する調査～山形県の場合～. 山形保健医療研究, 1, 1996, 39-44.
- 3) movieTIMES(internet)  
<https://www.movie-timestv/study/statistics/6354>